



南郷

札幌市立南郷小学校 学校だより 第5号
令和6年7月25日

【学校電話】011-861-9305

【学校ホームページ】

<https://www.nango-e.sapporo-c.ed.jp/>

補助輪 ~ 子どもたちが健やかに立ち立つために ~

校長 関根 治彦

私には息子が三人います。今、成人、大学生、大学生です。大きくなったとはいえ「目に入れても痛くない」という存在です。どんなことがあろうとも、この世界にこの子たちの父親は自分しかいないんだということを教えてくれる、大切な存在です。

喜ばしいことではありますが、寂しいことに、成人した長男は家を出て一人暮らし、次男は大学で本州にいます。先日、休みの日に長男の部屋を片付けている時に、デスクマットの下に年中と思われる頃の写真を見付けました。それは、補助輪を外した自転車に、初めて乗れた記念に撮影した写真でした。

保育園の年少の頃はおもちゃみたいな自転車で、後ろに支えがあって押してあげていたのが、いつの間にか補助輪付きの自転車になっていました。そして、年中のある日、「補助輪を外したい。」そんな息子の一言から、父の苦悩は始まりました。（スパナがあれば外せるな。外したら、スタンドを付けなとだめだな。それよりも、急に一人で乗れるわけないか。どうやって練習させるんだ？あ、ヘルメットも被らせないと。どこで練習しよう？家の前？車が来たらどうする？じゃあ公園か。あれ？うちの親、どうやって教えてくれたっけ？）自転車の教本がないかと本屋に行き予習して…、自転車を改造して…。公園でサドルを支えながら走り回りました。漕ぐ力が弱くて、なかなか自転車が倒れる恐怖が取れません。「足に力入れて。」「遠くを見て。下を見なくていいの。」「こわくない。大丈夫。」ゆるい坂をくだったときに、彼はタイヤ2本でも走り続ければ転ばないことを理解しました。そこからは早かった。私が手を放しても、自分の足でこぎ続けたのです。「できたー！」自信に満ちた最高の笑顔でした。公園にいる近所の人に息子を頼み、慌てて自宅に戻り、妻に声をかけ、カメラを持って公園に向かい、補助輪なしの自転車に乗れた記念にパシャリと撮影した写真でした（当然、ネガフィルムです。）

「教育は自転車の補助輪です。学校と家庭が手を取り合って進めましょう。」

昔、お世話になった校長先生の保護者会でのあいさつです。補助輪があれば走っていけます。いつかそれを外しても一人で走っていけるように、先生と保護者が左右の補助輪となって同じ方を向いて支えていく。向きを間違えないようにハンドルを握ってあげて、倒れないように体を支えてあげて、声を掛け続け、励まし続け、少しずつ手を放す時間を伸ばし、そっと気付かれぬように歩を緩めます。「ここまでおいで」と呼んだら、どんどん距離を伸ばして、やがて自分で決めた目標に向かってこぎ出したら、背中を見守ります。転んだらいつでも駆け寄る心づもりで、手を貸したい自分をぐっと抑えて。

明日から夏休みに入ります。残念ながら、長期休みになると、SNS上でのトラブルが激増します。子どもたちに時間的余裕が生まれると「便利」「楽しい」という理由で、子どもたちの間でSNSの使い方が広がっていくのです。まさに、ふらふらと一人で走り出している状態です。スマホを買い与えなくとも、ゲーム機やPCを利用したり、はては友達から借りたり、中古ショップで型落ちの安価なデバイスを内緒で購入したり、イタチごっこです（経験者は語るです）。では、補助輪としての私たちの働きとはどうすることなのでしょう。それは、スマホなどのネットにつながるデバイスを禁止するのではなく、使い方を教えると同時に、その危険性などについてもしっかりと指導すること。そして、時々その使い方を確認して、更に必要な指導を入れるということであると思います。SNSなどでの発言は友達だけに伝えたつもりでも、どんどん広がってってしまうこと（「人の口に戸は立てられぬ」と言いますね。）発言には責任が付いてまわるとのこと等々…。

子どもたちが自分たちでしっかりと漕ぎ出していけるように、補助輪がしっかりと働き、健やかに過ごせるように、切に願ってやみません。

余談にはなりますが、次男、三男は保育園でいつの間にか補助輪なしの自転車に乗れるようにしていただきました。（保育園の先生ありがとうございます。二番目、三番目のあるあるですみません。）